

久米の仙人——久米伝承の径路——

守屋俊彦

—

久米の仙人といえ、まるで好色者の代名詞のようになっていた。川の辺で洗濯をしていた女の白いはぎをみて仙力を失い、飛んでいた空から墜落したというのだから、そのようにいわれても致し方あるまい。この話は、今昔物語、扶桑略記、和州久米寺流記、元享釈書、などに記されている。これらの中では、今昔物語（十一の二十四）がもっとも詳しい。その墜落するところは、話の最初の部分なのだが、このように書かれている。

今は昔、大和国、吉野の郡、龍門寺といふ寺あり。寺に二人の人籠りて仙の法を行ひけり。その仙人の名をば一人をあづみといふ。一人をば久米といふ。しかるに、あづみは前に行ひ得て、すでに仙になりて、飛びて空に昇りにけり。

後に久米もすでに仙になりて、空に昇りて飛びて渡る間、吉野河の辺に、若き女衣を洗ひて立てり。衣を洗ふとて、女のはぎまで衣をかき上げたるに、はぎの白かりけるを見て、久米、心けがれてその女の前に落ちぬ。その後、その女を妻としてあり。その仙の行ひたる形、いま龍門寺にその形を扉に移し、北野の御文に作りて出したまへり。それ消えずして今にあり。その久米の仙、ただ人になりけるに、馬を売りける渡し文に、「前の仙、久

米」とぞ書きて渡しける。

これで見ると、彼は好色者だが、お人好しでもあるようだ。苦しい修行をして、やっと仙人になったというのに、たかだか女の白いはぎをみて、忽ちに仙力を失ったというのだから、どこか間が抜けている。しかも、自分を墜落させた、その当の女と結婚している。かと思ふと、売買の証文には「前の仙、久米」と署名したりしている。お人好しであるとともに、律義者でもある。この点、同じ好色者といっても、王朝のそれとは異なっている。王朝の好色者達は、結婚する気持もないのに女の間を遍歴したり、妻があるというのに他の女のもとに通ったりしている。そこには洗練された恋の技巧や、甘い雰囲気がある。ずるさもある。しかるに、彼は、白いはぎをみるや、一直線にこの女の前に墜落している。結婚しても、他の女に色目を使ったりはしていない。いつてみれば、泥くさい好色者である。いかにも中世の説話文学にでてくる人物らしい顔をしている。色好みとはいっても、素朴で憎めないところがある。

それにしても、なぜ彼は一直線に女の前に墜落したりしたのであろうか。そこに人間の本能がまるだしになって、そのような裸のままの人間がでてくるところにこそ、説話文学の面白さがあるといえればそれまでだが、折角手に入れた仙力を捨ててまでして、女の前に墜落して行ったところには、単に本能というだけではすまされない問題がひそんでいるように思われる。だからまた、相手の女にしても、川の辺で洗濯をしているのは、ただ白いはぎをみせるためのポーズというだけではなく、そこに何か別な意味があるような気もするのである。

二

ところで、この話をみると、久米の仙人は、あづみという仙人と一緒に龍門寺に籠り「仙の法を行」ったことになっている。扶桑略記(二十三)には「本朝往年有三人仙。飛龍門寺。所謂大伴仙。安曇仙。久米仙也。大伴仙草庵。有基無舎。余両仙室。干今猶存。」とあって、大伴仙という仙人がもう一人加わり、三人となっている。こ

の相伴仙、安曇仙の「大伴」「安曇」というのは、恐らくは、古代の氏族である、大伴氏や安曇氏に関係がある名であろう。つまり、この二人の仙人は、これらの氏族とつながりのある人物ということになる。とすれば、これらの仙人とともに仙の法を修した、この久米の仙人もまた、こうした古代の氏族とつながりがあるものと考えるのが普通であろう。その「久米」と同じ名前を持っている氏族としては、久米部がある。だから、久米の仙人は、この久米部とつながりのある人物と一応みて置いてよいのではないだろうか。

このことは、彼が久米寺を建てたとされているところからもいえそうである。彼はこの後、都が高市郡に造られる時、失なった仙力を取り戻し、その仙力によって、材木を山から都まで飛ばし、この功によって天皇より田を賜わ⁽¹⁾り、この田をもとにして久米寺を建てたというのである。

その後、このことを天皇に奏す。天皇もこれを聞きたまひて、たふとび敬ひて、忽ちに免田三十町をもちて久米に施したまひつ。久米喜びて、この田をもちてその郡に一つの伽藍を建てたり。久米寺といふ、これなり。

扶桑略記や元亨釈書なども建立者を久米の仙人としている。この久米寺は、大和志料に「白檀村大字久米ニアリ」とあるように、現在の橿原市久米町にある。畝傍山のちようど南にあたる。

この付近には、古く久米部が居住していたらしい。神武紀二年二月の条には、

天皇功を定め賞を行ひたまひき。道の臣の命に宅地を賜ひて、築坂の邑に居らしめ、異に寵みたまひき。また大来目をして、畝傍山の西の川辺の地に居らしめたまひき。今来目の邑と号くるは、こはその縁なり。

とある。大和平定の功によって、この地を賜わったというのである。橿原の近傍であり、武士集団の大伴氏とともに配置されているところからすると、都の防衛の意図がこめられていたのかもわからない。ただし、畝傍山の西とあるので、今の久米町とは少し位置を異にしている。今のはこの山の東南にあたる。或はその後移動したのかもわからない。もっとも、この山の周辺であることには変りはない。

その久米町に久米寺はある。寺の名が、氏族名や地名と同じであったところからすると、久米部の氏寺であったかもしれない。性霊集の「大和の州益田の池の碑の銘」(巻第二)には、「畝傍北に峙てり。来目の精舎其の良に鎮めたり。」とある。これで見ると、平安朝初期にはすでに建立されて居り、しかも、相当立派な寺院であったらしい。時代的にみても氏寺らしくみえる。しかし、その後は、扶桑略記に「堂宇皆亡。仏像猶坐_三畝野之中」。久米寺是也。」と記されているように、荒廃したようである。久米部の衰退と運命をともしたのかもわからない。

何れにしても、その久米寺を久米の仙人が建てたというのだから、彼が久米部とつながりがあるとしてみることは十分可能なように思われる。すれば、彼の故里も一応このあたりと考えて置いてもよさそうである。

ところで、元享釈書(十八)には、「久米仙者。和州上郡人。」とあって、彼の故里が「上郡」ということになっている。ただし、ここには、「上郡」とあるだけで、それがどの郡なのかははっきりしない。大和には「上郡」という名のつく郡が三つある。添上郡、城上郡、葛上郡、である。久米の仙人が活動した地域が、吉野郡や高市郡であつてみれば、この場合、これらの郡に近い葛上郡とするのが、一番穏当なところであろう。しかし、それならば、畝傍山の周辺からはずっと西にあたることとなり、この予想は少しずれてくる。

しかし、これは後にも述べるように、彼が仙人になり、この話が神仙譚に着色されるにつれて、その舞台が神仙の本場である吉野に移ってゆき、その中間過程として、葛城地方が持ちだされてきたものとみるべきであろう。もっとも、この地方は仙人に縁のある土地柄でもあった。「大和の国葛木の上の郡の茅原の村の人」である役の優婆塞は「毎夜に五色の雲に挂りて、沖虚の外に飛び、仙宮の寶と携(日本靈異記上二十八)わっていたという。その役の優婆塞は高賀茂の朝臣であつた。この朝臣の祖神であるアヂシキタカヒコネノ神は、アメノワカヒコの葬儀に列席した時、その死者と間違えられ、「怒りて飛び去」(記)ったという。その姿を妹のタカヒメノ命が

天なるや 弟棚機の 項がせる 玉の御統 御統に 穴玉はや み谷 二渡らす 阿治志貴高 日子根の神ぞ(六

と歌ったとある。この神は空飛ぶ神だったのである。この地方に空を自由に飛ぶ仙人の誕生する素地はあったのである。⁽²⁾

さて、この元享釈書には、この後に「入深山学仙法。食松葉服薛荔。一旦騰空。飛過故里。会婦人以足踏洗衣。其怪甚白。忽生染心。即時墜落。」と述べている。つまり、彼が墜落したのは、「故里」だったのである。ここでは、その故里は葛城地方なのだから、この付近に落ちたということになる。もっとも、ここには川は欠けている。しかし、「会婦人以足踏洗衣。」とあるところを見ると、やはり、川の辺であつたらしい。女は多分川で洗濯をしていたのであろう。そこで、その川だが、葛城地方であれば、今昔物語のように吉野川であつてもよいのだが、もっと近いものとして、葛城山の麓付近を流れている川、——葛城川あたりを考えてみた方がよいかもわからない。扶桑略記では、「但久米仙飛後更落。」とのみあつて、川ばかりでなく、この女も消えていて、すこぶる簡単な筋になっている。

それはともかくとして、ここでは、久米の仙人が墜落したのが、ほかならぬ「故里」であつたということに注意してみたい。だから、もし彼の故里が、前に述べたように、久米地方ということになれば、彼が落ちたのも、本来はその付近の川の辺ということになる。このような予測から、和州久米寺流記を見ると、「此毛堅仙常自龍門嶽飛通葛木峰。於其途中久米河有洗布之下女。仙見其股色愛心忽發。通力立滅落于大地畢。」とあつて、果して久米の仙人は、故里の久米川に落ちたことになっている。この久米川は、大和志料に「松前川ノ下流久米ニ於テ之ヲ称ス、」とあるように、松前川の下流で、久米地方を流れているために、久米川といったものである。泊瀬川が、三輪あたりで、三輪川といわれたのと同じことである。何れにしても、この話は、久米の仙人が、久米川の辺で女の白いはぎをみ、そこに墜落したというのが、最初の形ではなかつたかと思われる。

三

それならば、この女が川の辺で洗濯をしていたというのは、どういふことなのであるか。ここでは、仙人を誘惑するための、女のポーズということになるが、問題はその川のほとりというところにある。

ところで、このように女が川の辺で洗濯をしていて、結婚をするようなことになったものとしては、赤猪子の話(雄略記)がある。

また一時、天皇遊び行でまして、美和河に到りましし時、河の辺に衣洗へる童女ありき。その容姿甚麗しくありき。天皇その童女に問ひたまひしく、「汝は誰が子ぞ。」ととひたまへば、答へて白ししく、「己が名は引田部の赤猪子と謂ふぞ。」とまをしき。ここに詔らしめたまひしく、「汝は夫に嫁はざれ。今喚してむ。」とのらしめたまひて、宮に還りましき。故、その赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を経き。ここに赤猪子以為ひけらく、命を望ぎし間に、已に多き年を経て、姿体瘦せ萎みて、更に待む所無し。然れども待ちし情を顧さずては、愧きに忍びず、とおもひて、百取の机代物を持たしめて、参出て貢獻りき。然るに天皇、既に先に命りたまひし事を忘らして、その赤猪子に問ひて曰りたまひしく、「汝は誰れしの老女ぞ。何由以参来つる。」とのりたまひき。ここに赤猪子、答へて白ししく、「その年のその月、天皇の命を被りて、大命を仰ぎ待ちて、今日に至るまで八十歳を経き。今は容姿既に耆いて、更に待む所無し。然れども己が志を顧し白さむとして参出しにこそ。」とまをしき。ここに天皇、大く驚きて、「吾は既に先の事を忘れつ。然るに汝は志を守り命を待ちて、徒に盛りの年を過ぐしし、これ甚愛悲し。」とのりたまひて、心の裏に婚ひせむと欲はししに、その極めて老いしを憚りて、婚ひを得成したまはずて、御歌を賜ひき。

天皇の妻求ぎ説話である。全体がユーモラスで、どこことなく、ペーソスが流れている。天皇が自ら求婚したことを忘

れたり、赤猪子が八十年間もじっと待っていたりして、いかにも古代らしい、おおらかな話になっている。しかし、この話はずももとのようなものではなかった。赤猪子は三輪の大神に仕える巫女であった。彼女は、三輪氏にとって聖なる川であった三輪山の辺で、神衣を織りながら、この大神の来臨を待っていたのである。そして、神の嫁となった。三輪氏の神婚神話だったのである。ところが、この三輪氏が大和朝廷に服従したために、この神話が変容し、つまりは、妻求ぎ説話になったのである。赤猪子は巫女から童女になり、大神も天皇にすり替えられ、もともと聖なる川の辺で大神を迎えていた儀礼が、村の童女が天皇にみそめられる話にふさわしく、川の辺で洗濯をするという所作に変わってしまったのである。

赤猪子の話が本来このようなものであったとすれば、この久米の仙人の話も、或はそういうものであったかもわからない。久米部の祭る神と巫女との神婚である。何よりも、その舞台が久米部の故里であり、そこを流れる川が久米川であることが、そのことを思わしめるのである。三輪川が三輪氏にとって聖なる川であったように、久米川は久米部にとって聖なる川であったのではないだろうか。齋み川である。この川は、畝傍山の西側を、南から北へと巻き流れている。この山をとり巻くというのは、齋み川の一つの条件でもあったのである。

すれば、その川の辺に墜落したという久米の仙人が、ほかならぬ、久米部の祭る神ということになるのではないだろうか。この仙人は、高市郡に都が造られる時、官吏から仙力によって材木を運んでくれるようにと依頼されている。その時には、この女のことですでに仙力を失っていたのだが、本尊が助けられることもあるのかと思ひ、道場に籠るのである。

その後、久米、一つの静かなる道場に籠りて、身心清浄にして食を断ちて、七日七夜不断に礼拝恭敬して、心に至してこのことを祈る。しかる間、七日すでに過ぎぬ。行事官等、久米が見えざることを、且つは笑ひ且つは疑ふ。しかるに八日といふ朝に、俄かに空くもり暗夜の如くなり。雷鳴り雨降りて、つゆもの見えす。これを怪しび思

ふ間、とばかりありて雷止み空晴れぬ。その時にみれば、大中小の若干の材木、しかしながら南の山辺なる杣より空を飛びて、都を造らるるところに來にけり。その時に、多くの行事官の輩、敬ひてたふとびて久米を拝す。

美事に材木は空を飛んでいる。もっとも、ここでは、その本尊が現われて飛ばしてくれたのか、仙力をとり戻した彼自身がしたのか、そこが一寸はっきりしない表現になっている。それはともかくとして、ここで取り上げてみたいのは、「しかるに八日といふ朝に、俄かに空くもり暗夜の如くなり。雷鳴り雨降りて、つゆもの見えず。」とあるように、天候の異常な時にそれが実現しているということである。ところで、古代信仰では、このような異常な天候のさ中に、神々が出現することがある。海神の女であるトヨタマヒメは「風濤の壮けむ日に、海辺に出で到」(紀一ノ一書) っているし、小雨降る時に墮ちた雷神は「噉り霧りて天に登」(靈異記上三) っている。すれば、この背景には、古代の神出現の風景があるとみてよいのではないだろうか。それはまた、「七日七夜不斷に礼拝恭敬」したところにもみられるようである。七日七夜というのは、古代の祭りの聖なる期間でもあった。カモノワキイカツチノ命が父に酒杯を挙げる時、「外祖父建角身の命、八尋屋を造り、八つの戸扉を堅め、八腹の酒を醸みて神集へに集へて七日七夜楽遊」(山城風土記逸文) したとある。⁽⁴⁾ なおいわば、彼が籠っていたという道場も、仙法を修する処であろうが、もともと神を降すために籠る齋み屋であったのであろう。山城風土記逸文の八尋屋である。

そこで、このような幾つかの背景の中に、この久米の仙人を置いてみれば、彼には神を祭る者としての姿がみられるのである。ところで、古代信仰では、神を祭る者と神とは一つでもあったのである。すれば、彼自身も神であったといえる。材木を飛ばしたのが、本尊のようでもあり、彼自身のもあるところには、本尊と仙人、つまり、神と神を祭る者とが重なり合っているものとみるべきであらう。ともかく、彼は久米部の祭る神だったのである。それが、この仙人の原像だったのである。

ということになれば、この仙人と結婚した女は、この神に仕える巫女だったということになる。彼女は久米川の

辺で、神衣を織りながら、そこに来臨する久米部の神を待っていたのである。そして、神の嫁になった。これが、久米の仙人の物語の一番の原画なのである。何れにしても、仙人と女とは、もともと祭られる者と祭る者との関係にあったのである。この二人が、このように神婚によって密接に結ばれているのであってみれば、仙人がこの女のところに一直線に墜落し、その女と結婚したという筋も、そこから解けてくるのである。泥くさい好色な振舞などではなかったのである。もともと神婚の儀礼だったのだから、そうなるのが当然だったのである。仙人は墜落したのではなく、空から降臨していたのである。それが崩れに崩れて好色な話になっているのだが、仙人がこの女と結婚し、しかも、他の女に色目を使ったりしていないという、いささか生真面目な話になっているのも、実は、そのようなところからきているのである。

さて、延喜神名式をみると、高市郡に久米御県神社というのがある。大和には、添御県坐神社（添下郡）、志貴御県坐神社（城上郡）など、御県という名のつく神社があちこちにある。こうした神社があるところは、県の根源的な場所であつたろうといわれている。⁵⁾つまり、県を支配している神を祭っているのが、これらの神社なのである。すれば、久米御県神社は、久米地方を支配している神を祭る社ということになる。この神社は現在久米寺の南に隣接している。天神社ともいう。ところが、これについて、大和志料には、「此天神社ヲ以テ式内久米社トナシ現ニ村社タレトモ久米社ハ川辺ニアリテ天神社トハ位置ヲ異ニセリ」としている。その川辺がどの川なのかはつきり記していないが、久米御県神社の項に引用している、五郡神社記の「在久米郷久米村川辺「社家者久米」というのによれば、久米川とするのが常識であろう。久米川の辺の聖なる場所に鎮座していたのである。こ女は久米川の辺で神の来臨を待っていた。すれば、そこは当然聖なる場所ではなければならないのだから、この久米御県神社があつたあたりを想定してみてもどうであろうか。

ともかく、この久米の仙人の物語は、もともと久米部の神婚神話だったのである。それがこのように変容したとこ

るには、恐らくは久米部の没落ということが大きく作用しているとみるべきであろう。まずは、神婚という儀礼から神の面がとり除かれ、単なる人と人との結婚譚になり、それが崩れに崩れて、中世的な好色な話になったのである。もっとも、人とはいつても、もともと神であったところから、そこは異常な能力を持つ者としての仙人になり、それでいて、説話文学の主人公らしく、好色者になったのであろう。それとともに、その相手の女性も、聖なる巫女から、白いはぎをみせて男を誘惑する、ただの女になってきたのである。こうして、本来神を迎える儀礼であったものが、男と女との愛の出会い、しかも、牧歌的なそれにふさわしく、川の辺で洗濯をしている場面での出会い、ということになったのである。さらにいえば、この主人公が仙人に変身するにつれて、神仙譚に着色され、その舞台も、久米地方から、神仙の本場である吉野に移って行き、久米川も吉野川になったのであろう。⁽⁶⁾その中間過程として葛城川がある。これが久米伝承の辿った粗い径路である。

四

さて、この久米の仙人の物語の原画を推測するのに、一つの下絵となった、三輪氏の神婚神話では、その神の坐すところとして、三輪山があった。神の坐すところとしては山が必要であり、そうした神の山があってこそ、はじめて齋み川も生きてくるのである。それならば、この場合にも山が必要になってくるのだが、それはどこに求めたらよいであろうか。それには、やはり、このすぐ近くにある畝傍山をとり上げるのが穏当なところであろう。

この山については、このような歌がある。

狭井河よ 雲立ちわたり 畝火山 木の葉騒ぎぬ 風吹かむとす (記二〇)

畝火山 晝は雲とる 夕されば 風吹かむとぞ 木の葉騒げる (記二一)

古事記によれば、神武天皇の後であるイスケヨリヒメは、その三人の子がタギシミノ命によって殺されそうになっ

た時、これらの歌によって、迫り来る危機を知らしたというのである。寓意の歌である。しかし、その歌調が万葉のそれに近いところから、これらの歌は、畝傍山近傍の自然現象を歌った、叙景歌であろうということになっている。だが、前にも述べたように、風が吹いたり、雲が湧き上ったり、というような天候異常の時、神が出現するのであってみれば、こうしたことを歌いこんだこれらの歌は、歌調こそ万葉のそれに近いにしても、元來神の意志を述べたものとみることではできないだろうか。従って、乘岡憲正氏が「或いは伊須氣余理比売に神女としての巫女性を看取するならば、そこには神懸りする姫の口から発せられる極めて呪言的性格の強い呪歌ともとれる。」とされているのは、従うべき説であろう。だからこそ、これらの歌は、そのままの形で、この物語にうまく合った寓意の歌となり得たのである。その歌の中心に畝傍山がある。すれば、その神意と畝傍山とを結びつけてみてはどうであろうか。つまり、畝傍山を神の山としてみたいのである。神奈備山である。

ところで、池田源太博士は、この山に古墳が多いこと、その近くに曾我、忌部、久米、という、古代氏族と同じ名の地名が散在していること、さらには、大伴氏がこの山の南の鳥屋町や見瀬町に居住していたらしいこと、などから「畝傍山は蘇我・大伴・忌部の三氏連合勢力の中心的な山であることが考えられる。」とされている。ここでは、久米部は大伴氏の中にこめられているものと思われるが、この山をこれらの古代氏族と関連づけていられるのは、きわめて示唆的である。ただし、これらの氏族の中で、久米部の居住地がこの山にもっとも近く、しかも、久米川を舞台にした神婚神話があるところからすれば、これらの氏族をさらに絞って、久米部ともしっかり関係深い山としてみては如何であろうか。畝傍山は神の山なのだが、とりわけ、久米部にとっての神の山だったということである。このようにしてみると、神の山としての畝傍山、齋み川としての久米川、久米部の祭る神、その神の嫁としての巫女、——ということになって神婚神話の道具はすべて揃ってくるのである。こういう話がかつては久米部に管理されていたものと考えてみたいのである。しかし、それは記紀に取り入れられないで、崩れながら下層を流れ、説話文学として姿を

残しているにすぎないのである。⁹⁾ここでは、久米の仙人の物語から、ありし日の久米部の伝承を再構成してみようとしたのである。

この久米部は、前にも述べたように、神武紀によれば、大和平定の功によって、畝傍山の西に居住したことになる。しかし、これは話が逆なのであって、この氏族はもとからこの地に住まっていたのではないだろうか。彼等は畝傍山を自らの神の山と仰ぎ、久米川を舞台にしての神婚の儀礼を持ち、この地で豊かに生活していたのである。畝傍山から西、葛城山との間は、高田・御所を中心としてやや広く開けていて、古代の氏族が住みつくのには、恰好な土地でもあった。その久米部が大和朝廷に服属したところから、この地に住まわせられたというような話になったのであろう。もっとも、それが大和平定の功によるとしているところには、また別の立場からの、久米部の意図がこめられているものとすべきであらう。

そこから、さらにこのようなことを推測してみたい。神武天皇は大和平定の後橿原の地に都された。それが歴史的事実であるかどうかは別として、こうした伝承の背景には、或はこの久米部の存在が大きく与っているのではないだろうか。畝傍山はもとも久米部にとって聖なる山であったのである。ところが、大和朝廷に服属したところから、こんどはそれが大和朝廷にとって聖なる山となったのである。それは、恰も三輪山山麓地域の豪族たちにとって聖なる山であった三輪山が、これらの豪族が大和朝廷に服属するにつれて、大和朝廷にとって聖なる山となったのと同じ現象である。その畝傍山の麓に橿原がある。橿原とは、橿の木のはえている聖なる原の意であらう。味橿の丘のごときである。この橿原も、或は久米部にとっての聖なる場所であったのかもわからない。久米川の辺にある聖なる原である。それが、畝傍山とともに、大和朝廷にとっての聖なる場所になったのである。こうしたところから、神武天皇が橿原に都されたというように伝承されてきたのかもわからない。しかし、これはあくまでも一つの推測にしかすぎない。

最後に久米寺の縁起譚について少し説明を加えてみたい。はじめにも述べたように、今昔物語、扶桑略記、元亨釈書、などでは、久米の仙人が建立者ということになっている。ところが、和州久米寺流記では聖徳太子の弟にあたる来目皇子が建てられたとしている。

当寺者。来目王子之建立。推古天皇之御願也。

王子者豊日天皇之御子。上宮太子之御弟也。

此王子翳病黏而両目共盲矣。爰兄聖徳太子勸而世

医療方雖尽。其術終以不叶。干今者須殉出世之妙薬。東方有世尊号医王善逝。彼仏発心発願衆病悉除之利益也。深

仰彼悲願宜呈其金容云々。仍王子尽財抽誠而和州高市郡沢茨山甲勝之地。奉治鑄丈六金銅医王之金容併脇侍日光月

光二大菩薩之靈像。於焉王子引手於侍臣対面於仏像一礼僅記。両目立開畢。肆世举人称而始号来目王子。因建五間

四面之梵宇。即安一仏二尊之聖容。仍復寺同称来目寺云々。

大和志料はこれに従い、「俗ニ久米仙人ノ建立トスルハ非ナリ」としている。しかし、この皇子が久米寺を建てられたということは書紀にはない。推古十年二月に撃新羅大將軍に任ぜられて筑紫に至り、翌年二月にこの地で薨じている。思うにこれは、来目皇子の名がたまたま寺名と同じであり、しかも、偉大な仏教者である聖徳太子の弟であるところから、寺の莊嚴を飾るのには、この皇子を建立者とするのが、もっとも都合がよかったからであろう。一方からいえば、女の白いはぎに目のくらむような好色者が建てたとするのでは、寺としては困るところから、それを否定したのであろう。そして、この来目皇子の「目」から眼病のことを展開させ、寺の縁起譚としたのである。眼病が治ることを寺の縁起譚としたものとしては、靈異記下十一、十二、などがある。一つの型だったのである。しかし、久米の仙人の原像が、もともと久米部の祭る神であり、久米寺がこの氏族の氏寺であったとすれば、この仙人に結びつける方がより似つかわしいことなのではないだろうか。⁽¹⁾

注

(1) 和州久米寺流記には、「干時聖武皇帝依造東大寺之御願。被召國中入夫之内。仙被召其列而參洛。云々」とあって、聖武天皇

が東大寺を建立される時のこととなっている。

- (2) 神田秀夫氏 鴨と高鴨と岡田の鴨―山城風土記佚文考―(「国語と国文学」第四十三卷第四号) 七〇頁
 なお、青木紀元氏も、葛城山下に呪術宗教の発達する素因があったとされている(迦毛大御神―葛木の鴨の神「古事記年報四」七八頁)。

- (3) 拙稿 赤猪子の話―三輪伝承考―(「日本書紀研究」第六冊) 三八〇頁―三九〇頁。

- (4) これと同じような話として、播磨風土記託賀郡の条に、「荒田と号くる所以は、此処に在ます神、名は道主日女の命、父無くして児生みき。この為に盟酒を醸さむとして、田七町を作りしに、七日七夜の間稲成熟り竟へき。すなはち酒を醸し、諸神を集へ、その子をして酒を捧げて養へせしめき。ここにその子、天の目一の命に向きて奉る。すなはちその父なることを知りき。後その田荒れき。故、荒田の村と号く。」というのがある。僅か七日七夜で稲が成熟したという奇跡には、当然神力の働きを考えてみなければならぬ。七日七夜の間祭りをして、神を降したのである。

- (5) 池田源太博士 大和三山 一六六頁。

- (6) 下出積与氏は、吉野川の溪流、とりわけ宮滝付近は、「現在でも神仙を語るのにまことに適しい風水と環境をもつところなのである。」(「神仙思想」日本歴史叢書22・一九七頁)とされている。そこを舞台として、万葉集(三八六、三八七)や懐風藻(四五、七二、九九)などにあるように、柘枝の仙女譚が展開している。

- (7) 乗岡憲正氏 叙景歌の成立(「古代文化」第二十四卷第七号) 一八三頁。

- (8) 池田源太博士 大和三山 一〇九頁。

- (9) 神武記をみると、大久米命はイスケヨリヒメを后として推薦するにあたって、「此間に媛女あり。こを神の御子と謂ふ。その神の御子と謂ふ所以は、三島溝咋の女、名は勢夜陀多良比売、その容姿麗美しくありき。故、美和の大物主神、見感でて、その美人の大便まれる時、丹塗矢に化りて、その大便まれる溝より流れ下りて、その美人の陰を突きき。ここにその美人驚きて、立ち走りいすすき。すなはちその矢を將ち来て、その床の辺に置けば、忽ちに麗しき丈夫に成りて、すなはちその美人を娶して生める子、名は富登多多良伊須須岐比売と謂ひ、亦の名は比売多多良伊須須岐余理比売^{こはそのほとと云ふ事を悪}みて、後に名を改めるぞ」と謂ふ。故、こをもちて神の御子と謂ふなり。」と述べている。これは三輪氏の神婚神話である。それにしても、なぜ、ほかならぬ大久米命がそれを語らなければならないのであろうか。そこには、或は非常に屈折した形で、久米部のそれが投影しているのかもわからない。しかし、これははっきりしない。菅野雅雄博士は、ここには多氏の伝承が採り入れられているとされている(「古事記説話

の研究」一六〇頁。

(10) 直木孝次郎博士 奈良―古代史への旅― 岩波新書 三一頁―三八頁。

(11) 石田茂作博士は、来目皇子を建立者とする話を、久米寺ではなく、奥山久米寺の縁起譚とされている(「飛鳥随想」八三頁)。